

であり、2ヶ月の2℃貯蔵は可能であると思われた。

定植用の長さ60cmプランターには春にデルフィニウムを栽培していた古土を使用したため、リゾクトニア菌による立ち枯れを防ぐことを目的に、前もって殺菌剤を土壌灌注したうえで3株ずつ定植した。5日以内に萌芽が確認されたが、後に15%程度の個体が立ち枯れた。その後は順調に生育し(写真2)、12月下旬には約1mに伸長し、発蕾した(写真3)。

この方法により、7～8割の株を再利用できることが分かった。しかも、実生苗と比べ地下部が充実しているために、晩秋から冬期の開花も期待できる。さらに大株であるため、種子からの栽培と比べ、翌春の開花もボリュームがでる。一方で、約2割が冷蔵中や定植後の環境に馴染まず枯死した。7月に株を掘り上げた際、若干の湿度をもった状態で貯蔵させたが、根系を掘り上げピートモスなどで充填

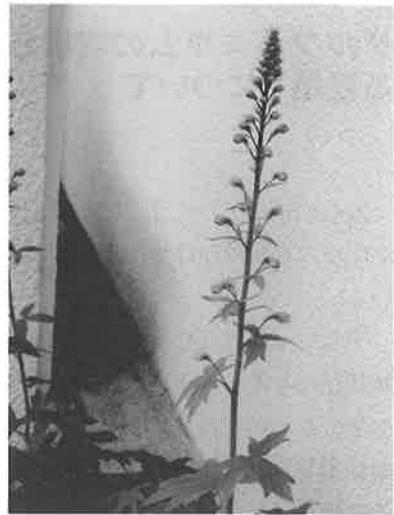
し乾燥貯蔵する方法も考えられる。貯蔵中のスペースを減らせられる利点も含め、今後この可能性について検討してみたい。

謝辞

本試験を遂

行するに当たって写真3. 冷蔵株の生育状況(12月上旬)

り、広島県農業技術センター勝谷範敏氏により種子の提供と助言を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

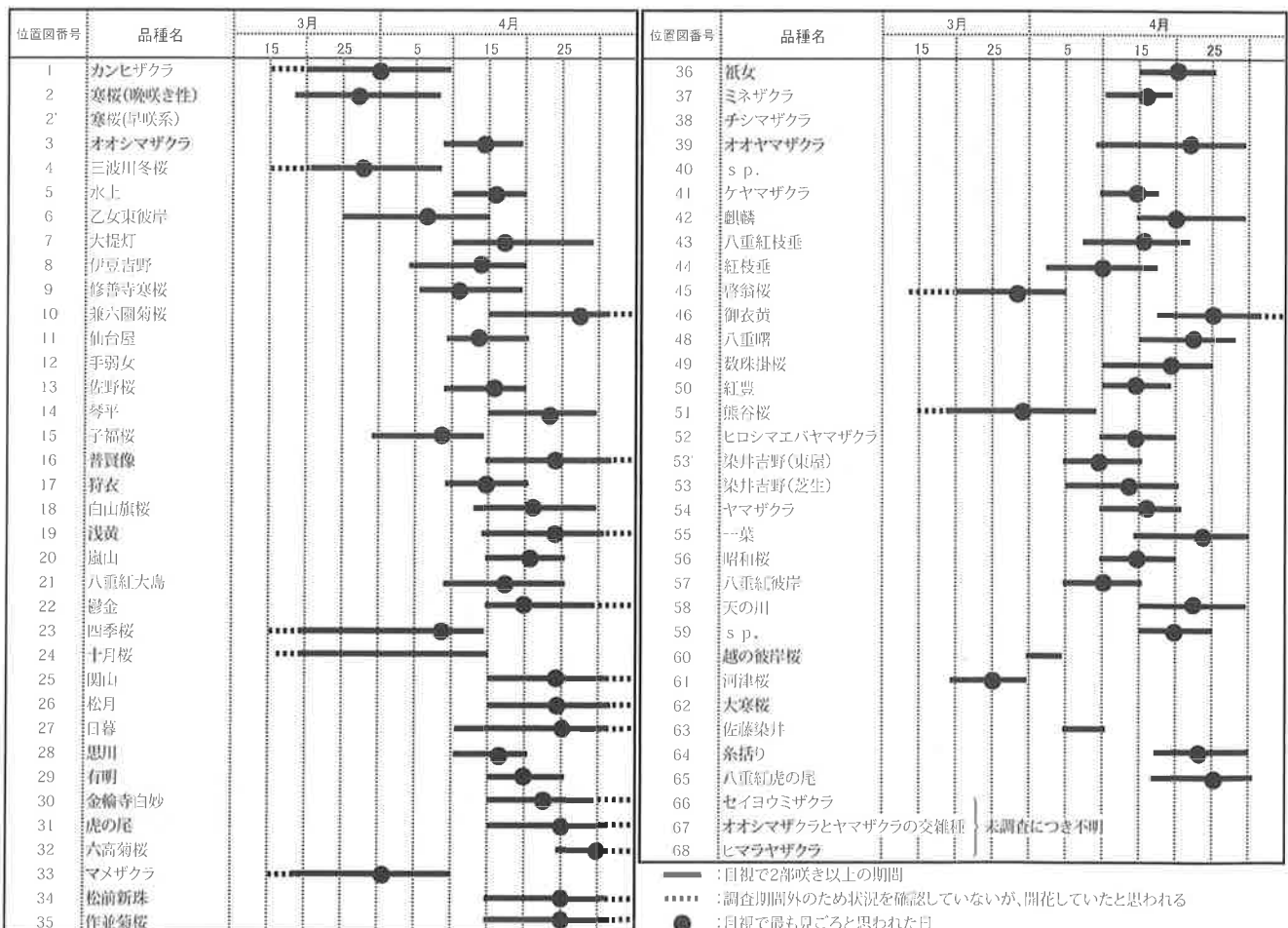


サクラの植栽位置と開花時期について

平井健一郎・世羅徹哉

平成17(2005)年3月から4月にかけて、サクラの個体別植栽位置並びに品種の確認(図)と、開花時期(表)を調査した。また、調査と同時に、品種がはっきり同定できたものには各株ごとに樹木ラベルの取り付けを行い、品種調査中の株には調査中

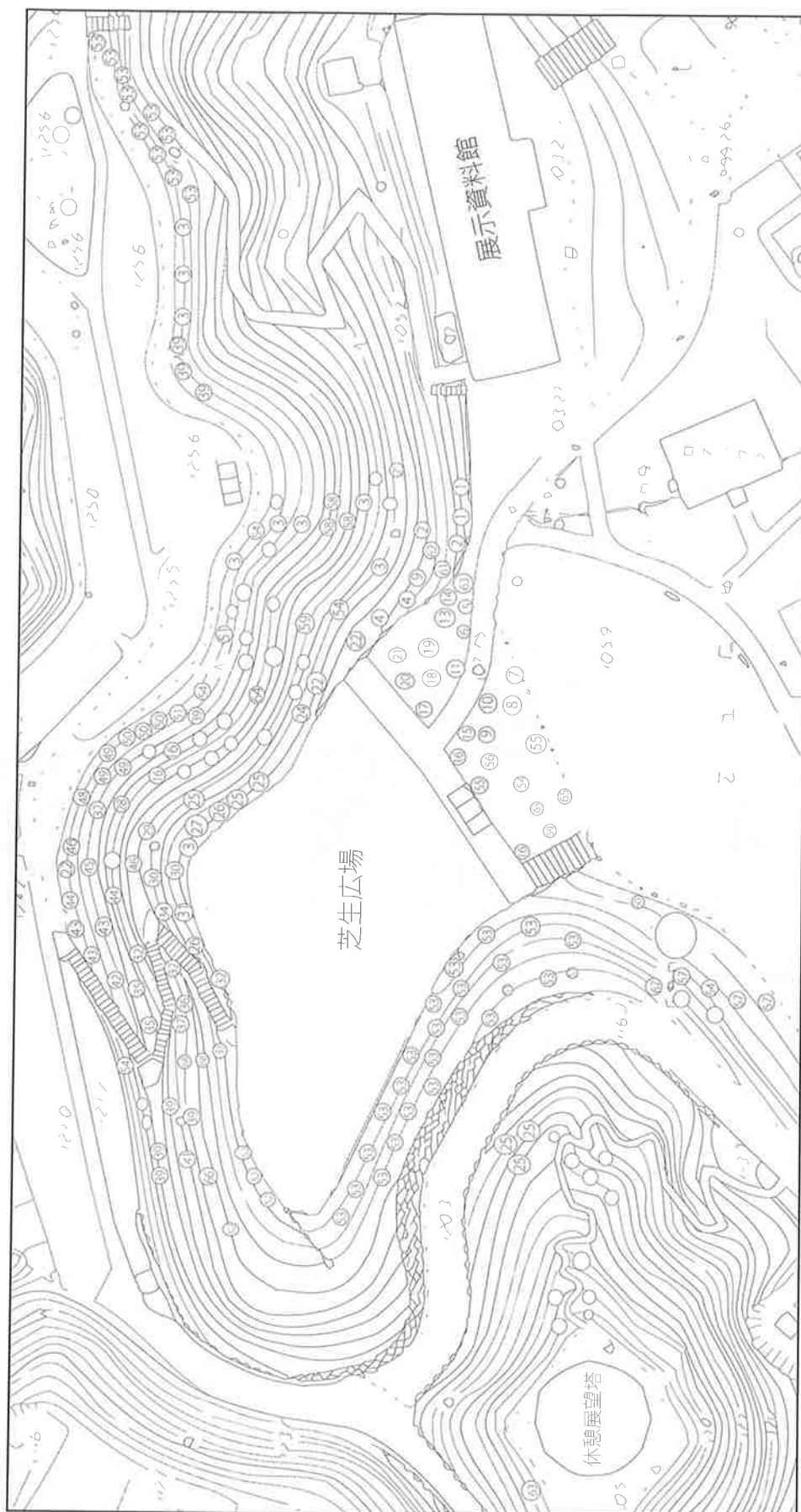
表. サクラ開花記録



を示す無記入のアルミ製ラベルを取り付けた。

平成 13 年度栽培記録「サクラの植栽状況と見頃」と比較すると、遅咲きのサトザクラ系品種ではほぼ同じ開花期となったが、カンヒザクラ、オオシマザクラ、染井吉野、水上、紅豊、紅枝垂、八重紅枝垂、

ヤマザクラなどの早咲き品種では 1 週間から 10 日程度開花が遅れた。これは、平成 16 年 12 月の気温が高かったのに加え、平成 17 年 3 月の気温が低かったためと考えられる。



図・サクラ植栽位置 (図中の番号は表参照)